

ABCD タイプ中国語擬声語重ね型の認知論的分析

張 恒悦

Abstract

ABCD is a type of altered reduplication in Chinese onomatopoeia, differing from the reduplicative patterns of repeating base forms such as ABAB and AABB. Until now, there has been almost no research focusing on the semantic structure of ABCD, and generally it has only been discussed phonologically. In this article, I analyze the cognitive mechanism behind ABCD by comparison with ABAB and AABB. I argue that ABCD corresponds to the cognitive mode of “Successive Irregular Sequential Scanning.” Compared with ABAB, which denotes a process of sounds with intervals, ABCD denotes one without intervals. The difference between AABB and ABCD is that the former evokes an image of sounds with the same timbre and volume, while the latter evokes an image of sounds full of variety.

Keywords : 擬声語, 重ね型, 音象徴, 連続・不規則型離散的認知

1. はじめに

現代中国語の擬声語には、AA（哗哗）、ABAB（哗啦哗啦）、AABB（哗哗啦啦）、ABB（哗啦啦）のような一定の「基式」（base form）の組み合わせによる重ね型もあれば、次のような声母と韻母の交替による重ね型もある。

- (1) 飞起的弹片和土块噼里啪啦地落了他们一身。（飛び散った砲弾のかけらや土くれがばらばらと彼らの全身にふりかかった。）¹⁾（『擬』）
- (2) 院墙稀里哗啦地倒了下来。（住宅を囲む塀ががらがらと崩れ落ちた。）（『現』）

このタイプの重ね型擬声語は4つの異なる漢字によって表記されている。以下、孟琮（1983）にならい、このタイプの重ね型擬声語を ABCD と記す。

本稿は ABAB や AABB との比較を通して、ABCD の意味機能の分析を試み、その認知的メカニズムの解明を目的とする。

2. 先行研究及びその問題点

ABCD タイプの擬声語重ね型に関する先行研究は大きく共時的なものと同時的なもの二種類に分けられる。前者には朱徳熙 (1982), 孟琮 (1983), 马庆株 (1987) などが挙げられるが, 朱徳熙 (1982) は特に注目に値する。当該論文は標準語と潮州語との比較を基に, 標準語の ABCD の生成過程について以下のような仮説を立てた (括弧内のイタリック部分は筆者)。

基本形式 A (たとえば *p'a*) は「変声重疊」によって A-(A)_s (たとえば *p'a-la*) となり, さらに「変韻重疊」を通じて (A-(A)_s)_y-A-(A)_s (たとえば *p'i-li-p'a-la*) となる。

この仮説の学術的価値は ABCD における音韻構造を解き明かしたことにある。

通時的研究としては石椋 (2005) を挙げることができよう。当該論文は「A 里 AB」の起源を探り, 金元時代の戯曲や明清の小説などを材料として分析を進めた結果, 現代中国語における「A 里 AB」のルーツが金元時代の「A' B' AB」(すなわち本稿でいう ABCD) にあるとしている。その例として, 金元時代の「急留骨碌 [ki liəu ku lu]」(A' B' AB) は明清時代に入ると「骨里骨碌」(A 里 AB) となったことが挙げられ, 特に第二音節の「留」が「里」となったことを力説している。

しかし, これらの先行研究には次のような問題点を指摘することができる。

- I いずれも音韻論的考察にとどまっており, ABCD の意味機能について触れていない。
- II ABCD と ABAB や AABB との相違が明らかにされていない。

3. 「双声」「疊韻」を用いた造語法

朱徳熙 (1982) では「変韻」「変声」という用語が用いられているが, 両者が実質的に中国語音韻論で言う「双声」と「疊韻」に対応していることは自明である。ややもすれば古めかしいイメージを与えてしまう「双声」と「疊韻」を本稿があえてキーワードとして採用しようとするのは, そのほうがより通りがよいことに加え, 金元明清にとどまらず, さらに上古中国語²⁾ にその源を見出せる「連綿語」³⁾ と関連付けることができるからである。

古代中国語において, 連綿語は特殊な語類に入る。即ち, 単音節語がメインであった古代中国語において連綿語は二つの音節から成るのである。語長 (word-length) が長いにもかかわらず, 連綿語は, 意味上, 音節ごとに分解できない連続的構造をなし, 且つその意味的特徴に対応する形式的特徴として「双声」, あるいは「疊韻」であることが多い。

連綿語という概念は古代中国語研究にはよく用いられているが, そこに潜む造語法の原理は現代中国語の擬声語研究にも応用できるのではないかと筆者は考える。邵敬敏 (1981), 王了一 (1982), 朱徳熙 (1982), 孟琮 (1983), 石毓智 (1995) 等が夙に指摘したように, “叮当”“哗啦”のような現代中国語の二音節擬声語は, そのほとんどが同じ声母をもつか (双声), 同じ韻母をもつ (疊韻)。しかしここでより重要なことは, 二音節擬声語も, 意味上, 連綿語と同じく分解できない連続的構造をなし, 意味的に一体性を有していることである。张恒悦 (2008) は意味

分析、音声測定、および使用頻度の調査を通して次のような結論に至った。

特別な場合を除き、二音節擬声語は二つの音節で一つの音を表すことが無標 (unmarked) である。換言すれば、二音節擬声語は意味上分割できない内部構造を有している。

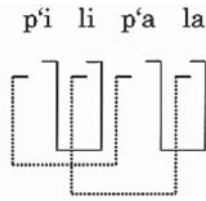
したがって、構成原理上、二音節擬声語は連綿語の流れをくむものである。

4. ABCD における音韻的特徴

中国語の音節は声母と韻母からなっている。ゆえに、「双声」と「疊韻」の働きは二音節語における二つの構成単位に音声的共通項をもたせることであると言える。これは中国語特有の言語現象のように見えるが、他言語においてこれを確認することができないわけではない。たとえば英語には *helter-skelter* のような同じ韻を踏む *rime words* があり、また *tick-tack* のような母音の交替によってできた *ablaut words* がある (Thun1963:44)。*rime words* は「疊韻」に相当し、*ablaut words* は「双声」に似ている。角岡 (2005) は日本語オノマトペにおける交替形語彙の分析を行い、「ぎくしゃく」を例に、「1 モーラ目の子音も母音も互いに相違しているが、2 モーラ目は「く」で共通している。これは、一種の脚韻であると言える。交替形の多くは、このような押韻の効果を狙っているものと考えられる」と指摘する。つまり、「ぎくしゃく」のような交替形語彙は2 モーラ+2 モーラで構成され、両者の間に「く」という共通項を見出すことができるのである。中国語における「双声」「疊韻」と同じ構成原理がここでも働いていると言ってよいであろう。戴庆厦・徐悉艰 (1992:433) では、カチン語 (景颇語) にも「双声」「疊韻」による語構成の方法があるという。たとえば、「a¹bren a¹bru 四处离散状」における第2音節と第4音節は「双声」であり、「a¹ro a¹hto 狼吞虎咽的」における第2音節と第4音節は「疊韻」である。このように、「双声」「疊韻」による造語法は何も中国語に限られたわけではなく、他の言語でも確認できる普遍的な語構成法であると言える可能性が高い。

野口 (1995) は筆者のいう ABCD タイプ擬声語重ね型を「チグハグ式重ね型」とよび、そうしたものが英語にも多く見られるという。また、玉村 (1979) は日中両言語の音象徴語の比較をした際に、ABCD タイプの擬声語を $XYX'Y'$ と表記し、先行音節の類似音節によってなる音節を $X'Y'$ とした。

しかし、ABCD の音韻構造上の特徴は以上のような観察で十分に解き明かされたとは言い難い。たとえば英語の *rime words* と *ablaut words* における子音や母音の交替は、いずれも一回のみできわめて単純な音韻変化である。一方、中国語の ABCD は四音節をきちんと揃えながら、以下に図示するように A と B、C と D、A と C、さらに B と D のいずれの間においても「双声」あるいは「疊韻」の関係が存在している。玉村 (1979) の $XY'Y'$ という表記では、AC と BD の関連は確認できても、AB と CD の関連性が反映されていない。

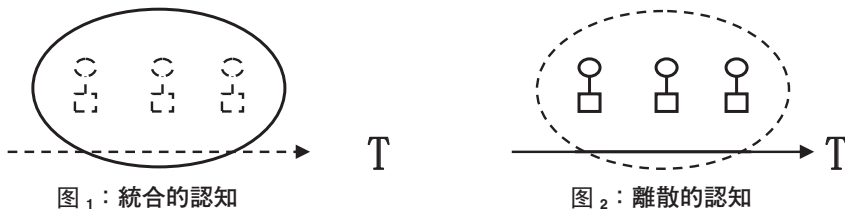


日本語の交替形語彙における音韻構造は英語のそれと同じ傾向が見られる。「からころ」⁴⁾のような ABCD に似たケースもないわけではないが、全体的に見てみた場合、その用例はまれで、周辺的な現象と言わなければならない。交替形語彙の大多数を占める「むしゃくしゃ」「ちらほら」「てきばき」「つべこべ」「どたばた」などはすべて ABCB 型で、A と B、C と B の間に同じ子音あるいは同じ母音が存在しておらず、シンプルな単層構造になっている。これに対し、中国語の二音節擬声語の場合、たとえば咿啦(pālā), 叮当(dīngdāng), 轰隆(hōnglōng), 咣当(guāngdāng)などは「双声」か「疊韻」が義務づけられ、さらに声母と韻母を交替させて重ねた結果、ABCD が生まれる。よって、構成原理的に英語や日本語と部分的共通点を見出せる中国語の ABCD の本質的特徴は、一個所のみ双声化あるいは疊韻化のいずれかを施すことにあるのではなく、A と B、C と D、A と C、B と D の間に複数個所にわたって双声・疊韻を繰り返し、重層的な音韻構造を作り上げている点にある。

5. ABCD の意味機能

5.1. ABCD と ABAB, AABB の共通点

中国語の四音節からなる擬声語の重ね型には ABCD 以外に、ABAB と AABB がある。そのため、ABAB と AABB の意味的特徴は ABCD の意味的特徴を考察する場合の手がかりとなりうる。張恒悦(2008)は張恒悦(2007)を踏まえ、ABAB も AABB も「離散的認知」という認知的特徴を有すると主張した。離散的認知とは「統合的認知」と対立する認知モードで、両者の相違は話者が問題の状況を認知する際にとる視点の違いにある。統合的認知の場合、話者は巨視的な視点(perspective point with global scope of attention)をとり、集合全体にフォーカスを置くが、離散的認知の場合、話者は微視的な視点(perspective point with local scope of attention)をとり、個体から個体へと認知の焦点の移動が起こるため、認知は時間軸に沿って行われ、動的持続的な様相を呈する。これを図示すれば次のようになる。



張恒悦(2008)が ABAB も AABB も離散的認知という特徴をもっていると主張した主な理由

は以下の三点である。

一、ABAB と AABB はともに動的持続性を有する。たとえば、

(3) 河水哗哗啦啦 (* 哗啦, 哗啦哗啦)。(川の水がザーザーと音を立てて流れている。) (Y)

例 (3) の“哗哗啦啦”は主語“河水”(川の流れ)の述語として、とどまることなく流れていく川の様子を音的に活写している。“哗哗啦啦”を“哗啦”に置き換えることはできない⁵⁾。“哗啦”⁶⁾は突発した一度きりの短い音を表すものであって、川の流れのように持続的な動態を描写するには不適切だからである。“哗哗啦啦”を“哗啦哗啦”に置換することは可能である。ここから“哗啦哗啦”も動的持続性を有することがわかる。

二、ABAB と AABB は文法機能を同じくする。中国語の重ね型は、文法機能という角度から見れば、必ずしも同じ振る舞いを見せるとは限らない。たとえば数量詞の“一 CC”と“一 C 一 C”は、例 (4) (5) のように、いずれも連用修飾語と連体修飾語の位置に出現するが、例 (6) (7) のように述語と様態補語の位置に出現できるのは“一 C 一 C”のみである。

- (4) 司机把车门开到最大限度, 把客人一个一个 (一个个) 往里塞。(運転手は車のドアを目一杯開け、車内に客を一人また一人と押し込んだ。) (北)
- (5) 一个一个 (一个个) 的技改方案终于让我们改成了, 效率提高 30%。(ひとつまたひとつの技術改革が私たちによって成し遂げられ、効率は 30% アップした。) (北)
- (6) 出土的时候, 藕片一片一片 (* 一片片), 七个孔都看得非常清楚, 保存得非常好。(掘り出された時、スライスしたレンコンは一枚一枚と原形を留めていて、どれも七つの穴がはっきりと見て取れ、保存状態が非常に良好だった。) (北)
- (7) 她的眉毛又粗又黑, 头发烫得一卷一卷 (* 一卷卷) 的。(彼女は眉が太くて黒く、パーマのかかった髪の毛はくるくるとカールしている。) (北)

このような違いが生じる所以は両者が対応する認知モードの相違にある。“一 CC”は統合的認知モードに対応し、“一 C 一 C”は離散的認知モードに対応する(張恒悦 2007)。下例 (8) ~ (11) から、ABAB と AABB が“一 CC”ではなく“一 C 一 C”の文法機能と一致していることがわかる。

- (8) 风吹着树枝呼呼啦啦 (呼呼啦啦) 地响。(風が吹き、木の枝をひゅうひゅうと鳴らした。) (北)
- (9) 石工们那丁丁当当 (丁丁当当) 的敲击声, 如一声声鼓点, ……(石工たちによる石材の細工や加工の音は、まるで続け様に太鼓を打つリズムのようなもので…。) (北)
- (10) 海啸声轰轰隆隆 (轰隆轰隆), 仿佛千万副石磨一齐在这江峡中碾过。(海はごうごうとうなり、あたかも長江の峡谷を無数の石臼がぶつかりながら転がっていくようだった。) (北)
- (11) 雨下得哗啦哗啦 (哗啦哗啦), 君初把相机揣在怀里避免打湿。(雨がざあざあ降っているので、雨に濡れないように君初さんはカメラをふところに入れた。) (G)

ABAB, AABB と “一 C 一 C” との間に文法的一致が見出せることは、両者の間に認知上の共通点が存在することを示唆している。

三、ABAB と AABB はともに構成単位 AB の完全重複 (complete reduplication) によってできたバランスのとれた重ね型であり、形式上、均衡性を欠く “一 CC” とではなく、均衡を保った “一 C 一 C” と類似する。これはアイコン性 (iconicity) の原理が作用した結果であると考えられる。即ち ABAB, AABB と “一 C 一 C” との間に形式上の類似性が認められることは、意味的にも (あるいは認知的にも) ABAB, AABB と “一 C 一 C” との間に類似性が認められるということである。

では、ABCD の場合はどうであろうか。以下、意味、文法、形式の三つの観点から考察していく。

次例から、ABCD は ABAB, AABB と同様に動的持続性という意味的特徴をもっていることがわかる。

- (12) 聚会地点是南锣鼓巷的一个 Cafe, 大雨稀里哗啦, 虽然诸多不便, 但是大家很捧场。雨天 + 胡同, 很古典很清静的味道。(集りの場所は南锣鼓巷にある Café であった。雨がざあざあ降っていて、移動にはいろいろな不便があったにもかかわらず、みんなが来てくれた。雨に横町, 古典的で脱俗した雰囲気がそこにあった。)(Y)

一定時間降り続いて始めて「大雨」となる。降雨は動的持続性を特徴とする事象であり、ABCD がその述語に充当することは、ABCD が動的持続性を有する根拠となる。ABCD は述語以外に、連用修飾語、連体修飾語、様態補語としても機能する。たとえば、

- (13) 众人含泪, 稀里呼噜喝起粥来。(みんなが目に涙をためて、ずるずると粥をすすりはじめた。)(北)
- (14) 铃当的声音越来越清楚, 伴随着叮铃当啷的撞击声和急促的马蹄声。(鈴の音がますますはっきりと聞こえてきた。同時にがちゃがちゃと物がぶつかり合う音やせわしげな馬蹄の音もやってきた。)(北)
- (15) “二八一十六, 四八四十八, 五八……” 小坡继续着念。大家稀里哗啦, 一齐在石板上画“8”。(「二八, 一十六, 四八, 四十八, 五八…」と小坡は唱え続けた。みんながガチャガチャと音を立てて、一齐に石盤に「8」を書いた。)(北)
- (16) 虽然此时的山风把我宿舍的窗子抽打得噼里啪啦, 可我高兴!(この時, 山風が吹いてきて、私の宿舍の窓をがたがたと鳴らしていたが、私はむしろ嬉しかった。)(Y)

以上の事実から、ABCD が ABAB, AABB と同じ文法的特徴を有していることがうかがえる。

最後に、ABCD の形式的特徴について考察する。朱德熙 (1982) は二音節擬声語 CD (たとえば p'ala) を ABCD の「基式」であると主張する。実際、多くの CD は ABAB (p'ala p'ala) と AABB (p'a p'ala la) の AB として用いられる。そして、ABCD の AB に充当する部分 (たとえば p'ili) は CD の韻母を変えてできたものである。この意味において、ABCD も ABAB, AABB と同じく、二音節擬声語をベースにして形成された完全重複である。

以上述べたように、ABAB と AABB との間のみならず、この二形式と ABCD との間にも多くの共通点が見出せる。換言すれば、ABCD は ABAB, AABB と同じく離散的認知のタイプに属するものと推察される。すなわち、話者は静的視点ではなく動的視点によって、これらの擬声語が表す事態を把握しているのである。しかし、これは決して ABAB, AABB, ABCD が等値であることを証明するものではない。以下二節に分け、この三者における認知上の差異を検討してみる。

5.2. ABCD, ABAB, AABB の相違点


5.2.1. 内部構造の無界 (unbounded) 性

ABCD, ABAB, AABB に関するインフォーマント調査を行った結果、ABCD と AABB との間における互換性が ABCD と ABAB との間におけるそれより高いことが判明した。具体的に以下の例を見てみれば、

- (17) 轰鸣的马达声，欢快的鼓号乐曲声，**噼噼啪啪**（？噼啪噼啪 噼里啪啦）的鞭炮声，同上万名群众的欢呼雀跃声，震荡着山野。（鳴り響くモーターの音や、太鼓やラッパの賑やかな音や、爆竹を激しく鳴らす音などと一万人以上の群衆があげた歓呼の音が、山野に響きわたっている。）（北）
- (18) 机关枪居然又**劈里啪啦**（劈劈啪啪 ？劈啪劈啪）地响了起来。（意外なことに、機関銃がまたタタタタと鳴り始めた。）

例 (17) の“噼噼啪啪”を“噼里啪啦”に置き換えることはできるが、“噼啪噼啪”に置き換えるとやや不自然になる。例 (18) では、“劈里啪啦”は“噼噼啪啪”との間に互換性が認められているものの、それを“劈啪劈啪”にすると許容度が落ちる。ここで傍証として“劈里啪啦”に関する『中』の説明を引いておく。

【劈啪】1. (略)。

2. 【劈里啪啦】**注意**“劈里啪啦”に同じだが、この意味で用いるときは、必ず“孩子们劈劈啪啪地鼓起掌来”(子供たちはぱちぱちと拍手をした)のように「AABB」の形をとる。

上記の『中』の説明は、ABCD が ABAB ではなく AABB と互換可能であることを注意喚起している。これは筆者の行ったインフォーマント調査の結果と一致している。その理由は何であろうか。この間に答えるには、まず ABAB と AABB の関係を明らかにしなければならない。

張恒悦 (2008) は ABAB と AABB の差異について分析し、両者の対応する認知モードがそれぞれ異なっていることを指摘した。図示すれば、以下の通りである。(G は認知の主体を、矢印のついた点線は認知のフォーカスの移動を、T は時間軸を、四角は音声をそれぞれ表す。)

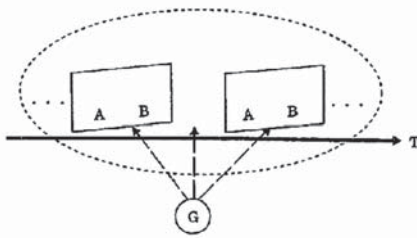


图 3: ABAB (離散的認知)

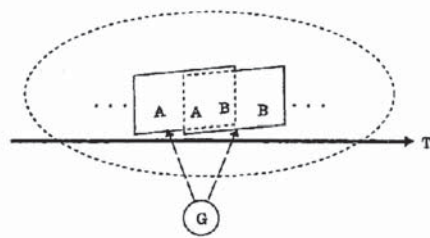


图 4: AABB (交錯型離散的認知)

ABAB では認知のフォーカスが時間軸にそって移動し、集合の個体 (AB) を逐一スキャンしている。それゆえ、個体と個体の間に間隔ができ、非連続的スキャンニングとなっている。一方、AABB では個体と個体が重なり合うため、構造の内部は連続していて無界である。両者の差異は以下の例に現れている。

- (19) 有一座小钟，没有指针，表框里只有几个劳动者在干活。一个用脚踏机器，双腿在协调的运动；一个用手在不停地敲打；还有一个用胳膊在努力地拉拽，每个人的动作都节奏鲜明，正好合着嘀嗒嘀嗒 (* 嘀嗒嘀嗒) 的声响。(小さな置き時計に針はなく、そのフレームの中で何人かの労働者人形が働いている。一人は足で機械を踏み、両脚がなめらかに動いている。一人は手でなにかを頻りに叩いている。もう一人は腕で懸命になにかを引っ張ったりする。どの人もリズムカルな動きをしていて、その動きが時計の動く時のチクタクという音にぴったり合っている。) (G)
- (20) 这时却传来了一个声音，从车里发出的 5000 只手表嘀嗒嘀嗒 (* 嘀嗒嘀嗒) 的不大的声音，确实不是大得人人都听得见，却大得足以让那官员知道东西藏在哪里。(この時、ひとつの音が聞えてきた。車の中から 5000 個もの腕時計が発するかちかちという大きくはない音だった。確かに誰でも聞き取れるほどの音量ではなかったが、税関のスタッフに密輸品のありかを知らせるには充分の音量であった。) (『读』)

(19) と (20) の ABAB, AABB には互換性がない。例 (19) では“每个人的动作都节奏鲜明”であるため、リズム感の強いオノマトペが要求されるのだが、AB と AB の間に間隔があり、リズム感に富む ABAB (“嘀嗒嘀嗒”) はこうした文脈にマッチする。これとは対照的に、例 (20) は 5000 個の腕時計が同時に動くときの音を表しており、時差や音色などのために種々様々な音が響きあう様子が連想される。そのため、リズム感の強い ABAB ではなく、雑多でとぎれのない連続音を表す AABB (“嘀嗒嘀嗒”) を選択するのが自然となる。

さて、ABCD と AABB の間における互換性に話を戻せば、例 (17) (18) において、ABCD から AABB へと変換できるのは両者がいずれも連続スキャンニングを特徴としているからである (例 (17) (18) を再掲する)。

- (21) 轰鸣的马达声，欢快的鼓号乐曲声，噼噼啪啪 (噼里啪啦 ? 噼啪噼啪) 的鞭炮声，同上万名群众的欢呼雀跃声，震荡着山野。(鳴り響くモーターの音や、太鼓やラッパの

賑やかな音や、爆竹を激しく鳴らす音などと一万人以上の群衆があげた歓呼の音が、山野に響きわたっている。) = (17)

- (22) 机关枪居然又劈里啪啦(劈劈啪啪 ? 劈劈啪)地响了起来。(意外なことに、機関銃がまたタタタと鳴り始めた。)(G) = (18)

例(21)は“马达声”“鼓号乐曲声”“鞭炮声”が“群众的欢呼雀跃声”と一緒に山にこだまする大変にぎやかな状況を描いている。この場合、あちこちで大量の爆竹が勢い良く鳴らされるのが普通である。間隔性の強い“噼啪噼啪”が用いられず、連続的で無界である“噼里啪啦”が互換可能な所以はここにある。例(22)の“劈里啪啦”は機関銃の射撃音を描写するものである。“機関銃の射撃音”といえ、隙間のないさまや間をおかずに発射される様子が連想される。この場合、切れ目のある“噼啪噼啪”よりも、切れ目をもたず一体化した音声である“噼里啪啦”か“噼里啪啦”で形容するほうが優ることはいうまでもない。

張恒悦(2008)はABABとAABBの違いをアイコン性という視点から論じたもので、両者の意味分析を進める過程において両者の形式的特徴に注目した。形式上、AABBとABABを区別するのは基式の配列順序(syntactic order)である。音声単位ABを順に連続させたABABに対し、AABBは先行の音声単位ABの間に後続の音声単位の開始音であるAが挿入され、終了音であるBが最後に置かれている。即ち、形式的に見れば、先行の音声単位ABへの認知が完了しないうちに後続の音声単位ABへの認知がはじまっていることになる。よって、先行音声単位と後続音声単位の間切れ目がなくなる。AABBの「間断なく」「無界」「連続」といった意味的特徴は、その基式の配列順序を通して形式的にも確認できるのである。

同様に、ABCDの無界性もその形式に反映されている。前述した通り、ABCDの形式的特徴は「双声」と「疊韻」を重ねているところにある。「双声」と「疊韻」からなる連綿語においては、二つの音節が重なってはじめて意味をなし、細分不可能な意味構造になっている。歴史的に見た場合、中国語の基本語彙が単音節から二音節へと変化をとげた唐代⁷⁾以後の金元時代に出現したABCDは「連綿語」の原理で二音節の擬声語をさらに複音節化したものとみなすことができる。この分析が成立すれば、ABCDの音声的特徴は、連綿語と同様、その意味上の細分不可能性、すなわち無界性に対応していると言えよう。要するに、AABBは基式の配列順序という形態操作を通して内部構造の無界化を実現したのに対し、ABCDの場合は双声疊韻という音声手段によって内部構造の無界化を実現したのである。

5.2.2. 連続・不規則型離散的認知

以上、双声疊韻によりABCDの無界化が実現していることを論じてきたが、双声疊韻がABCDの意味構造における役割は無界化のみではない。双声疊韻による音象徴(sound symbolism)という側面にも目を向けなければならない。

- (23) 老佛爷瞪了她一眼，摆摆手，叽里咕噜地不知说了些啥。(西太后は彼女をじろりとにらみつけ、手を振り、もごもごしゃべったが、何を言っているのか分からなかった。)(北)
- (24) 他以为我们是懂英语的，就叽里呱啦讲起来，但是我们听不懂。(彼は私たちに英語が

通じると思い、べらべらしゃべり始めたが、私たちは分からなかった。) (Y)

“叭里咕嚕”と“叭里呱啦”はともに話し声を表す擬声語であり、しかもその話し声からは内容を聞き取ることができないものを表している。両者の違いは、話し声の大小にある。筆者の行ったインフォーマント調査によると、“叭里呱啦”のほうが“叭里咕嚕”より声が大きいの。これは『現』の次のような語釈に合致している。

叭里咕嚕：形容别人听不清楚或听不懂的说话声，也形容物体滚动的声音。

(口の中にこもってよく聞き取れない声，また，物が転がる音)

叭里呱啦：形容大声说话的声音。

(大声でうるさくしゃべる声)

“叭哩咕嚕 [tcilikulu]”と“叭里呱啦 [tcilikuala]”はCDを構成する二つの音節の韻腹(主要母音)が異なる。“叭哩咕嚕”の“咕嚕”の韻腹は[u]であり、“叭里呱啦”の“呱啦”の韻腹は[a]である。[u]の開口度は小さく、[a]の開口度は大きい。この違いが両者に異なる音声的イメージをもたらしたものと考えられる。さらに、次の例を見られたい。

(25) 我们围坐一团踢里吐嚕 (* 滴里嚕嚕) 吃面条时气氛相当融洽。(私たちが輪になって座りうどんをつるつるとすすむ時、雰囲気はとても和やかであった。) (北)

(26) 在这么个小岛上，到处都能看到意大利人拉家带口的身影，听到他们滴里嚕嚕 (* 踢里吐嚕) 的意大利语。(この小さな島の至る所で、家族連れのイタリア人の姿が見られるし、彼らがべらべらとしゃべっているイタリア語が聞こえてくる。) (Y)

(25)と(26)の“踢里吐嚕”と“滴里嚕嚕”を入れ替えることはできない。なぜであろうか。“踢里吐嚕”と“滴里嚕嚕”は有気音と無気音で対立している。周知のように、英語をはじめとする外国語は有気音をその音声上の特徴としない。そのため、言語生活の中で有気音を多用する中国語の母語話者にとって、外国語は有気音の多い言語と捉えにくいものとなっている。したがって、外国語のようなあまりわからない言語が話されている場合についての印象を描写する際に、“滴里嚕嚕”のような無気音を中心とする ABCD を用いることが一般的である。それとは対照的に、麺や粥は吸い込むようにして口に入れるので、強い氣息を伴うように感じやすい。それゆえ、麺や粥を食べる際の擬声語には、強い氣息を連想させる有気音で構成される“踢里吐嚕”が相応しくなるのである。

従来、音象徴の視点から中国語の擬声語を研究することはあまり行われてこなかった。しかし以上の例からわかるように、中国語の擬声語においても、音声の違いが意味の違いに対応する音象徴の原理が応用されていることが確認できる。こうしたことは、本稿の ABCD に対する考察に新たな理論的根拠を提供する。以下の例を参照されたい。

(27) 这时却传来了一个声音，从车里发出的 5000 只手表嘀嗒嗒嗒 (* 嘀里嗒啦) 的不大的声

音, 确实不是大得人人都听得见, 却大得足以让那官员知道东西藏在哪里。(この時、ひとつの音が聞えてきた。車の中から 5000 個もの腕時計が発するかちかちという大きくはない音だった。確かに誰でも聞き取れるほどの音量ではなかったが、税関のスタッフに密輸品のありかを知らせるには充分の音量であった。) = (20)

- (28) 曹操听到嘀哩嗒啦 (嘀嘀嗒嗒) 的喇叭心里就痒痒…… (曹操はラッパの音を聞くと、むずむずしてきた。) (Y)

前述したように、ABCD も AABB もともに無界という特徴を有するため、両者の互換性は高いが、互換できない場合もある。(27) はその一例で、“嘀嘀嗒嗒”は使えるが、“嘀哩嗒啦”は用いられない。どのように解釈すればよいだろうか。

AABB は同じ AB を均等に重ねているが、ABCD には同一の音節が見られない。これを音象徴的視点から考えれば、次のような推測が立つ。即ち、AB を均等に重ねた AABB は音質も音量も一定に保たれた音と対応し、それぞれの音節がすべて異なる ABCD は変化に富んだ音と対応する。例 (27) の“嘀嘀嗒嗒”は腕時計の発する音である。数は多いが、腕時計は規則的に音質も音量も等しい音を立てる。これを以て AABB が選択され、ABCD が却下された理由であると考えることができる。一方、例 (28) の“嘀哩嗒啦”はラッパの音である。楽器の出す音は複雑で変化に富む場合が多く、それが ABCD “嘀哩嗒啦”を選択する動機づけとなる。(28) には AABB “嘀嘀嗒嗒”を用いることもできる。起伏の激しい不揃いな音が強く意識されると ABCD が選択され、音量や音質を保ったまま規則正しく鳴り続く音が意識されると AABB が選択される。

最後に、以上述べてきたことを踏まえて、ABCD の擬態機能について一言触れておきたい。

- (29) 家具被这伙人打了个稀里哗啦。(『現』)
 (家具はこいつらにばらばらに壊されてしまった。)
- (30) 他腰带上滴里嘟噜地挂着好多钥匙。(『現』)
 (彼はベルトにさまざまな形の鍵をぶら下げている。)

この二例はいずれも『現』から引いたものである。(29) の“稀里哗啦”も (30) の“滴里嘟噜”も音声ではなく、状態を描いており、『現』では“状態詞”に分類されている。両者に対する『現』の語釈は以下のようなものである。

- 稀里哗啦：形容七零八落或彻底粉碎的样子。
 (ちりちりばらばらなさま。徹底的に打ちのめされるさま。)
- 滴里嘟噜：形容大大小小的一串东西显得很累赘，不利落。
 (大小不揃いの物が雑然と集まっているさま。状態が整然としていないさま。)

“七零八落”にせよ“很累赘，不利落”にせよ、いずれも乱雑で不規則な状態を読み手に感じさせる。ABCD の擬態機能はその擬声機能と平行な関係にあり、すべて異なる音節からなる ABCD は、聴覚的に不規則なパターンの音声をイメージさせるだけではなく、視覚的にも不

規則なパターンの状態をイメージさせるのである。

以上をまとめると、離散的認知をベースにした ABCD は「連続」に加え「不規則」もその本質的意味特徴としている。このような特徴に基づき、本稿はこの種の認知モードを「連続・不規則型離散的認知」と呼ぶ。図示すれば、以下のようなイメージになる。(G は認知の主体を、矢印のついた点線は認知のフォーカスの移動を、T は時間軸を、不規則な図形は音声をそれぞれ表す。)

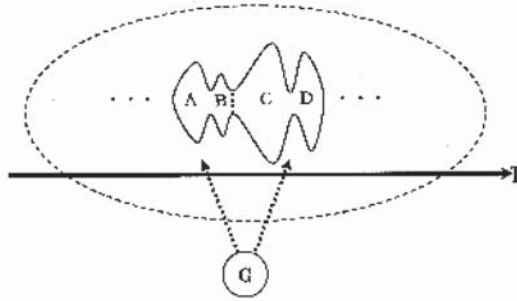


図 5：連続・不規則型離散的認知 (ABCD)

6. おわりに

AA, ABAB, AABB, ABB といったタイプの擬声語重ね型と比べれば、ABCD に関する先行研究は比較的多い。これは、その顕著な音声の特徴が多く、研究者の目を引いたからだと考えられる。しかし、先行研究は ABCD の音声面にとどまり、文法的特徴や意味的特徴についての考察をほとんど行ってこなかった。そうした状況に鑑み、本稿では認知的視点から ABCD の文法的、意味的特徴に対するアプローチを試みた。その結果、ABCD に対する認知モードは連続・不規則型離散的認知であるという結論を得た。そして、そのような認知モードを形成するにあたり、双声疊韻による内部構造の多層化と音象徴のもたらす不規則性が決定的役割を果たしていることを指摘した。

注

- 1) 本稿では日本語訳によるミスリーディングを避けるため、例文の訳文において擬声語に当たる部分の日本語訳を付さないケースもあった。
- 2) 徐振邦 (1998) によれば、すでに甲骨文字に連綿語が存在したとする説がある。
- 3) 連綿語の中に“重言”(AA)が入るかどうかについて、古くから意見が分かれている。本稿では、『現』に従い“重言”を連綿語の中を含めない。
- 4) 「からころ」の音韻的特徴については天沼 (1974) を参照。
- 5) “嘩啦”のような二音節擬声語は単独で述語になりにくい。次の例における“嘩啦”は単独で述語になったわけではなく、「対拳構造」の一部となっているのである。“刹那之间，公路两旁，悬崖之下，深谷之上，砂石哗啦，洪水奔流，陡添条条瀑布……”（一瞬，道路の両側と崖の下と深い谷の中に，砂や石がざあっと落ちてき，洪水が激しい勢いで流れ，いくつもの滝が現れて…）。なお，「対拳構造」には，本来成立できない文法単位を成立可能にする働きがある。鈴木 (2001) を参照。
- 6) 擬声語において異体字が多く存在している。たとえば，“噼啪”は“劈啪”とも書く。本稿では異体字の擬声語を同じものとして扱う。

- 7) 中国語の基本語彙における二音節化は唐代前後において定着したと見られる。董秀芳 (2002) と朱庆之 (1992) を参照。

例文出典

- (北) : 北京大学汉语语言学研究中心语料库检索系统
http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/jsearch/index.jsp?dir=xiandai
(G) : Google 检索系统 <http://www.google.com/intl/zh-CN/>
(Y) : Yahoo 中国雅虎 <http://cn.yahoo.com/>
【中】 : 『中日辞典』北京商務印書館・日本小学館 (2003 年版)。東京 : 小学館。
【擬】 : 『中国語擬音語辞典』野口宗親 (1995 年版)。東京 : 東方書店。
【現】 : 『现代汉语词典』中国社会科学院语言研究所词典编辑室 (2005 版)。北京 : 商务印书馆。
【读】 : 『读者』2005 年 10 期 63 頁。兰州 : 甘肃人民出版社。

インフォーマント : A, 男, 47 才, 河南省出身。B, 女, 37 才, 遼寧省出身。C, 女, 53 才, 北京出身。D, 女, 35 才, 河北省出身。

参考文献

日本語文献

- 天沼寧 (1974). 『擬声語・擬態語辞典』, 東京 : 東京堂出版。
角岡賢一 (2005). 「日本語オノマトへの交替形語彙分析」, 『龍谷大学国際センター年報』第 14 卷。
野口宗親 (1995). 「中国語擬音語概説」, 『中国語擬音語辞典』, 東京 : 東方書店。
鈴木慶夏 (2001). 「対拳形式の意味とシンタクス」, 『中国語学』248 号。
玉村文郎 (1979). 「日本語と中国語における音象徴語」, 『日本語と中国語の対照研究論文集 (下)』, 東京 : くろしお出版。
張恒悦 (2007). 「数量詞の重ね型 “一 CC” と “一 C 一 C” について」, 『立命言語文化研究』第 18 卷 4 号。

中国語文献

- 戴庆厦 徐悉艰 (1992). 『景颇语语法』, 北京 : 中央民族学院出版社。
董秀芳 (2002). 『词汇化 : 汉语双音词的衍生和发展』, 成都 : 四川民族出版社。
马庆株 (1987). 「拟声词研究」, 『语言研究论丛』1987 年第 4 辑。
孟 琮 (1983). 「北京话的拟声词」, 『语法研究和探索 (一)』。北京 : 北京大学出版社。
邵敬敏 (1981). 「拟声词初探」, 『语言教学与研究』1981 年第 4 期。
石 镔 (2005). 「论 “A 里 AB” 重叠形式的历史来源」, 『中国语文』2005 年第 1 期。
石毓智 (1995). 「论汉语的大音节结构」, 『中国语文』1995 年第 3 期。
王了一 (1982). 『汉语语法纲要』, 上海 : 上海教育出版社。
徐振邦 (1998). 『联绵词概论』, 大众文艺出版社。
张恒悦 (2008). 「拟声词的重叠——以 AA, ABAB 和 AABB 为中心」, 『中国語学』255 号。
朱德熙 (1982). 「潮阳话和北京话重叠式象声词的构造」, 『方言』1982 年第 3 期。
朱庆之 (1992). 『佛典与中古汉语词汇研究』, 台北 : 文津出版社。

英語文献

- Thun, Nils. *Reduplicative Words in English: A Study of Formations of the Types: Tick-tick, Hurly-burly and Shilly-shally*. Sweden: Uppsala Carl Bloms Boktryckeri A.-B. Lund Stockholm : AB Studentbook, 1963

